

煙突周辺から石綿

解体時以外も飛散の恐れ

調査省交国

アスベスト(石綿)を断熱材に使った煙突や隣接する部屋などで、通常よりも多くの石綿が飛散していることが12日、国土交通省の調査でわかった。同様の煙突は全国のビルや学校で広く使われ

ている。問題となる建築物の解体時以外にも石綿が飛散する可能性があるという、同省はさらに調査を進める。

同省によると、石綿は煙突の内部で断熱材として使われており、同省が大手ゼネコン(総合建設会社)などと共同で全国の事業所など約60カ所を調査した結果、通常は空気中1立方メートルあたり1本未満とされる石綿繊維本数を大きく超える事例が複数見つ

つた。煙突内の石綿が劣化したうえ、煙突に隣接する機械室内部でも石綿を含む建材を使用しているケースでは、室内の空気1立方メートルあたり1.1と1.8本見つかった。これとは別に、内部の石綿が崩れ落ちているなど著しく劣化した煙突の場合では、隣接する機械室の室内で同4.8と9.1本、煙突頂部で同2.5と12本、

煙突の底では13と24本見つかったという。同省は2008年度から石綿に関する調査を実施。今回の結果は09と11年度にかけての調査分。一方、東京労働安全衛生センターの外山尚紀・作業環境測定士らは09年2月と今年2月、1970年代につくられ、建物のボイラーと接続し、断熱材に石綿が使われている煙突9本を調査。ボイ

ラーを稼働させた状態や、現在使っていない煙突でも温風を送り込んだ模擬実験では、9本すべての頂部で石綿繊維の飛散が確認された。